

令和7年度 第4回 白馬村観光地経営会議 議事録

<開催日時>

令和8年2月17日(火) 13:30~15:00

<場所>

白馬村役場 302 会議室

<議事>

1. 開会
2. 会長あいさつ
3. 協議事項
(1) 白馬村観光地経営ビジョン(案)について
4. その他
5. 閉会

<委員>

(座長)

矢ヶ崎 紀子 東京女子大学 現代教養学部 経済経営学科 教授

(委員)

高梨 光 一般社団法人 HAKUBAVALLEY TOURISM 代表理事

丸山 徹也 八方尾根観光協会 会長

和田 寛 株式会社ズクトチエ 共同代表

草本 朋子 HAKUBA SDGs ラボ 代表

伊藤 英喜 一般社団法人白馬村観光局 代表理事

中村 実彦 白馬村ホテル・旅館代表

ケビン・モラード Hakuba International Business Association (欠席)

岸 清美 白馬商工会 副会長

臼田 友和 八十二銀行白馬支店 支店長 (欠席)

横川 秀明 白馬村教育長

松沢 英志郎 株式会社白馬館 経営企画部部長

平瀬 久美子 ほおずきファーム白馬代表・民宿かくひら館 (欠席)

福島 和子 VILLA こまくさ

(アドバイザー)

白濱 雄太 白馬村 GX 統括監・サステイナビリティコーディネーター

1. 開会
2. 会長あいさつ
3. 協議事項
(1) 白馬村観光地経営ビジョン(案)について

ビジョンの確定

(矢ヶ崎座長)

- ・ 白馬村観光地経営ビジョン（案）について、今までご意見をうかがってきたが、追加でご意見はあるか。

(委員)

(一同 賛同)

(矢ヶ崎座長)

- ・ 特に異論はないようなので、白馬村観光地経営ビジョンを確定としたい。既に調査・分析できている統計データと今後整備していくべき統計データが明確に整理されている点、キックオフプロジェクトが明確になっている点、推進体制と財源が明記されている点等から、この計画を基に今後具体的に動いていくということが伝わってくる計画となっている。

今後に向けて期待すること

(伊藤委員)

- ・ 今ここにいるメンバーは、責任を持ち、本ビジョンに沿って推進体制を作っていくことが求められる。また本ビジョン推進にあたっては、村の他計画とも整合性を持って進めていくことが重要である。
- ・ 白馬村観光局は現在、この大自然の恩恵を次世代につなぐためにできるだけ多くの事業者对社会貢献してもらうことが大切だと考え、観光局会員の会費の抜本的な改定に取り組んでいる。現在、索道事業者は他事業者と比較して多額の会費を支払っているが、索道事業者よりも多く収益を上げている事業者も存在し、そういった事業者の方が会費が圧倒的に低い現状は、改善すべきである。どのような事業者も白馬村の資源、そして観光にまつわる白馬村の環境の恩恵を受けているからこそ観光産業を営むことができおり、その分地域に還元してもらうことが必要である。住みやすい環境を作っていくためにそれなりの負荷を担っていただくことは、ここで生きていく上で当たり前のこととも言える。
- ・ ビジョンを推進していくためには財源が必要である。変革を起こしてきちんとした仕組みにシフトしていくことがサステナブルであると思う。
- ・ 損得ではない共通認識を持って取り組んでいきたい。五竜エリアの観光協会でも、観光局に会費を納める仕組みに関する改革が進められている。転換期のため、委員の皆様ともしっかりとコミュニケーションをとり、よりよくするために進めていきたい。

(草本委員)

- ・ パブリックコメントについて、しっかりと本ビジョンを読み込んで意見をくださっていると感じた。本ビジョン作成を通して、KPI や、KPI 算出のために不足しているデータが明らかになった点がよかったと感じている。一方で、10年後の検証についても仕組みを検討しておくべきである。
- ・ ビジョンに教育に関する要素が多く入っている点が喜ばしい。住民が白馬らしさに誇りをもち、その白馬らしさを観光客にも見せていくためには、地域の学校での教育も重要である。白馬高校は近年応募者も増えているが、さらに観光業とタッグを組んで、体験機会、観光地としての白馬の将来について考える機会の創出等が進められるとよい。

(岸委員)

- ・ 私は当初から、ウェルネスの村としての白馬村の全体像があって、その上でスキーリゾート、マウンテンリゾートについて考えるべきではと提言していた。ウェルネスの村であれば、季節間わ

ず1年中観光客が訪れることとなる。

- ・ 雨・雪の日、観光客はカフェに1杯のコーヒーのみで2時間座っており、地域にお金が落ちていない点もつらいと感じる。こういったときに、温泉やウェルネス関連の施設があればよい。実行力のあるまちづくり企業に対して、提案の一般公募を行うのも一案ではないか。

(福島委員)

- ・ 白馬で様々な事業に携わってきたが、全般的に村の対応は遅いという印象を受けている。宿泊税に関しても、早めに段取りをしてもらいたい。限られた財源をうまく使って次の世代に引き継いでいくためには、村が方向性を示して主導権を握って進んでいくことが必要である。
- ・ もっと若い人たちがまちづくりに参加できる環境があるとよい。
- ・ 観光協会や観光局等、観光関連の団体が多すぎる。簡素化した方が、全体がまとまって1本となって進んでいけるのではないか。

(白濱アドバイザー)

- ・ 4回の会議を通して、広いテーマについて話してきた。観光に関する会議だが、暮らしに直結する話が出てくるのが今の白馬の観光の議論である。
- ・ 観光を下支えしているのが地域の暮らしで、それがあつたからこそ白馬は今お金を稼げる観光地になっている。観光と暮らしをトレードオフの関係にさせないためには、お金がどう入ってきてどう出ていくのかという仕組みを透明化することが大切であるといえる。地域の豊かさのために、観光客への良質な体験のためにお金が使われていることを明確にするべきである。
- ・ 会議で見えてきた課題を、まずは可視化していきながら、フラットに議論する土台を作っていくことが大切である。
- ・ 自分たちの望ましい方向に持っていくために、お金の使途や循環の仕組みづくりを含めて、様々なステークホルダーが議論できる基盤を今後作成していきたい。
- ・ 会議の場では、観光地と観光客のお金を介してばかり考えがちだが、それだけでない観光客との関係性を意識し、現場で地域の人と観光客の間で起こっていることを大事に議論したい。

(松沢委員)

- ・ 目標像に地域やローカルといったテーマが入った点は良かった。スキーブームを経て、世界的な知名度も得て、現在投資家・事業者が多く入ってきているという、白馬村観光100年の歴史を踏まえた計画になっていると感じられる。
- ・ 冬だけ働く事業者が多いと、定住人口が不安定化し、インフラ維持ができなくなり、財政基盤も脆弱になるといった、悪循環に陥る可能性がある。通年型オールシーズンマウンテンリゾートの実現に向けて各々が取り組んで、四季を通じて、山の上から下まで一体となって進めていける体制を作ることが大切である。
- ・ 白馬は、定住人口の増加、インフラ整備、財政基盤、季節労働者からの脱却、人材確保、地域に利益が残る構造の整備などを進めていき、良い投資ができるサイクルになるチャンスを持っていると感じる。
- ・ 頂上からふもとまでのすべてで本質的な価値を体験できる場所として、白馬をブランディングしていくことが中長期的に大切である。これを下支えするのが地域のコミュニティである。
- ・ 外からの投資も必要である。地域貢献協定の計画書のようなものの提出を事業者に求め、ビジネスと同時に地域への貢献にも取り組んでもらうための仕組みづくりを、村としても進めていけたらよい。ベネフィットアグリーメントの設定も一案である。また問題への対応にあたっては、不動産会社との連携も重要である。
- ・ 地域の皆さんと協議しながら白馬ルールを作成し、それに基づいて事業者はビジネスをするとい

う仕組みを作成することが必要である。今後も、地域にお金が残る循環の仕組みづくりに取り組んでいきたい。

- ・ バックカントリーは白馬における重要な観光コンテンツの1つであるが、一方で毎年死者が出ているという実態もある。バックカントリーの利用人数や行動実態に関するデータも把握していきたい。

(横川委員)

- ・ 住んでよし、訪れてよし、働いてよしという内容をビジョンに書いていただき感謝している。専門用語をわかりやすく解説してくださった用語集も勉強になった。
- ・ 白馬高校における全国高等学校「観高サミット」の開催が決定した。全国の各地から観光課をもつ高校の学生が集まり意見交換を行う予定である。本ビジョンの内容も高校生に勉強してもらいたい。白馬村の小中学生は総合的な学習の時間において、白馬の歴史文化と観光を学ぶ。その中で、経営ビジョンの内容をピックアップして勉強していくことが重要であると感じている。

(和田委員)

- ・ 我々は何のために観光振興に取り組むのか。結局は、地元の子供・孫が観光業を営んで生活を続けられること、たぐいまれなる観光資源を活用して生活が続くことがゴールである。
- ・ このような前提に立つと、基本戦略の中でも2-1、3-1、3-3が重要である。稼げる観光業をつくり、収益が地元で再投資され、地元の子供たちが住み続けられるようにする、といった目標に向かうための要素がちりばめられている良いビジョンだと感じる。こういった目標に向けて、行政と民間が主体的に取り組んでいく必要がある。計画を作って終わりではなく、目標に向けて事業を捉えていくべきである。
- ・ 観光関連の組織の在り方についても、組織が多すぎるという現状を踏まえ、きちんと見直しを行う必要がある。ゴールに向けて必要な組織について、大胆に議論しても良いかと考える。

(中村委員)

- ・ 何のために観光を行うのか。現在は外国人のためにやっているようにも感じられてしまうが、本来は、住民が住んで幸せと感じる環境があって、初めて観光が成り立つと言える。住む人のために環境を改善して、それをこれから若い人たちに引き継げるように取り組むのが今後の仕事だと思っている。
- ・ 現状をしっかりと把握できていることがまず大事である。何が起きているのかわからない実態が各所にある。
- ・ 昔から白馬に住んでいる人が転出して、新たな人が多く入ってきている今こそ、観光産業は何のために、誰のためにあるのかを見直すべきである。ビジョンを見据えつつ、コミュニティの中で話し合いをしていきたい。
- ・ お客様がストレスなく滞在できる状態にしていくことが重要ではないか。

(高梨)

- ・ P36の【参考】地域内経済循環の仕組みが、よくまとまっていると感じる。地域内経済の循環は非常に大事であり、この会議で重視してきたことでもある。そしてさらに問題に切り込むと、定住人口のキープというのは重要な問題である。白馬は繁閑差が大変大きく、その格差を埋めるためには閑散期である夏季の集客強化が求められる。そのためにも、松本・長野等と連携し、広域で観光を進める体制を作っていくべきである。
- ・ 白馬村はもっと、景色や景観を売っていくことが必要だと考える。

(丸山)

- ・ 白馬観光において、冬は稼ぎ時である。冬は白馬で商売を行い、ほかの時期は自分の国に帰るといふ外国人も存在するし、冬の可能性に可能性を見出し白馬に進出する大手事業者も存在する。そういった部分ばかりが近年はクローズアップされている。
- ・ 「地域住民が誇る、オールシーズン型マウンテンリゾート・コミュニティ」という目標像が今回設定されたが、その中で大切にしたいことの一つとして、白馬の山岳文化が挙げられるかと考える。それを新規参入事業者にも伝える必要がある。
- ・ 民宿も、山岳文化の中で始まった重要な白馬の要素である。従来は、いらしたお客様を大切にすする小さな宿が数多く村内に立地していたが、近年は経営を手放した宿や、外国人が多く訪れるため長年の顧客が宿泊できなくなってしまった宿も存在する。本ビジョンの期間において、改めて本当に大切なものを見つめ直し、今まで白馬に来てくださっている方々、ファンの方々との関係づくりを、若い世代の方々と一緒に行っていきたい。ファンは白馬のことをよく知ってくださっている、一番の宣伝マンであると考えます。
- ・ この春以降、多くの新規開発計画が発表されている。それらの開発が行われた暁には、文化が伝わり、理解された白馬村になっているかという観点を持ちつつ、ビジョンに沿った取組を進めていきたい。若い人たちが考えるきっかけを与えていきたいと思っている。

(矢ヶ崎座長)

- ・ 次の世代にバトンを渡すところまで見届けていきたい。
- ・ 地域ぐるみの取り組みが大切である。次世代を担う子供たちや、事業者、その他外部の方々にもこのビジョンを共有して、皆でこのかけがえのない空間を将来につないでいくことが求められている。やるべきことは多いため、油断なくチェックしながら進めていくことが必要である。

4. その他

5. 閉会